

ちだのしょう 千田荘へ続く平安時代の大きなムラ

多古町千田の台遺跡見学会



13~17 竪穴住居跡周辺 (南東から)



調査中の千田の台遺跡風景

主催：公益財団法人 千葉県教育振興財団 後援：千葉県教育委員会・多古町教育委員会
 協力：国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所・イーグルレイクゴルフクラブ

本日は千田の台遺跡の見学会にお越しいただき、ありがとうございます。

千田の台遺跡は、圏央道の大栄～横芝区間の建設に伴う発掘調査として、今年の4月から調査を始めた遺跡です。遺構の広がりを確かめる確認調査の結果、東側の調査区から、たくさんの竪穴住居跡が見つかり、東側調査区全体に古代集落の広がりが確認されました。西側の調査区からは溝や土坑など、中世の遺構が多く見つっています。

今日ご覧いただくのは、今年度の調査区のうち、東側部分となります。短い時間ではありますが、どうぞごゆっくりご見学ください。



32 竪穴住居跡焼土・遺物出土状況 (南から)

千田の台遺跡の概要

千田の台遺跡は、北東側を流れる多古橋川と南西側の高谷川に挟まれた台地上で、両河川から延びる支谷の谷頭に位置しています。

千田の台遺跡(1)として発掘調査を進めていますが、約2,000㎡の範囲から奈良・平安時代を主体とした集落の一部が発見されました。現在は40軒ほどの竪穴住居跡が調査されています。

調査中の竪穴住居跡のうち、1軒のみが古墳時代終末期(約1,400年前)で、ほかはすべて奈良時代～平安時代に営まれた住居跡と考えられます。この時期で最も古い竪穴住居跡は、調査区東端に位置する002竪穴住居跡と思われます。

7世紀末～8世紀初頭(奈良時代)



002 竪穴住居跡全景 (南から)
(東側の壁は調査範囲外)



須恵器蓋



土師器高杯

1と2は須恵器の大きい杯の蓋です。1は表面に自然釉がかかり、丁寧な作りであることから、静岡県湖西産、2はつまみ部分が扁平となり、内面にカエリの痕跡が残っていることなどから茨城県新治産と思われます。カエリの痕跡が残る蓋はこの時期の特徴です。3は土師器の高杯で、古墳時代から継続して使われており、高杯の最終段階の形をしています。

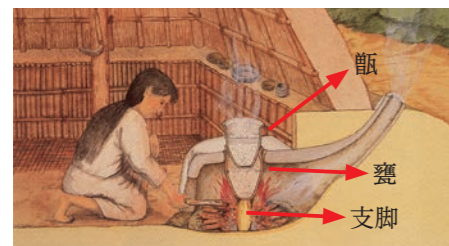


002 竪穴住居跡遺物出土状況 (南から)

8世紀中頃(奈良時代)



019 竪穴住居跡全景 (南から)



カマドの使用想定図 (『千葉県歴史資料編 考古3』より転載)



須恵器杯



土師器小型甕



土師器甕

3は甕で、口縁部の下端に4個の小さな突起が付けられた珍しい土器です。甕は底に穴があり、甕の上に重ねてカマドで米を蒸したりしています。

8世紀後半から9世紀前半(奈良時代～平安時代)

これまで調査された集落では、8世紀後半～9世紀前半に営まれた竪穴住居跡が多くみられます。右の写真は021竪穴住居跡から出土していますが、2の土器がやや新しい時期と考えられます。土器の表面に「里」と思われる墨書土器が書かれています。大宝律令に制定された地方行政の「国郡里」制は、712年に「里」から「郷」に変更され、740年には「里」が廃止されました。2の土器は9世紀前半と考えられることから、行政の「里」を示す文字ではないと思われます。



021 竪穴住居跡出土土師器杯

9世紀後半(平安時代)

調査区北東側の020竪穴住居跡を掘り込んで大きな土坑(023)が造られ、底面近くから杯が出土しました。この土坑は住居跡の貯蔵穴の可能性もあります。杯の1点は文字が書かれた墨書土器で、明確ではありませんが「旭」と書かれているように思われます。



023 土坑遺物出土状況 (西から)



墨書土器「旭」



「旭」の字形
(『五體字類』より転載)

千田の台遺跡の特徴

千田の台遺跡は現在調査中であるため、全体像が明らかとなっていませんが、調査範囲に限って言えば、古墳時代の竪穴住居跡が1軒のみで、他はすべて奈良・平安時代の竪穴住居跡群で構成された集落となっています。それまでほぼ無住の地となっていた台地上に、奈良時代になって集落が形成される状況は県内に多くの例があります。「開発型集落」と呼ばれるタイプで、8世紀になって他地域からの入植者によって新たに開発された集落という点がこの遺跡の大きな特徴といえるでしょう。

千田荘と千田の台遺跡

平安時代の終わり頃から、現在の多古町とその周辺部に「千田荘」(ちだのしょう)と呼ばれた荘園があり、荘園内に館をもった藤原(千田)親政は、源頼朝の挙兵に応じた千葉氏と戦い敗れています。荘園領主は、崇徳天皇の後藤原聖子であったと考えられています。

鎌倉時代には千葉氏一族の所領となり、当主は代々千田氏を名乗り、鎌倉幕府執権である北条一族の金沢氏と親戚関係を結び、多古町土橋山東禅寺は、金沢称名寺(横浜市)と深い関係をもつ学問所として発展します。南北朝時代になると千田氏は千葉本家と対立し、戦国時代はじめての千葉一族の内乱では、千葉城を追われた千葉本家が当地に逃れています。その後、本遺跡南側150mの境砦跡等、多くの城館が築かれますが、後半には坂田城(横芝光町)を本拠とした小田原北条氏の家臣井田氏の領域に入ったようです。

本遺跡の平安時代の集落の調査では、千田荘と直接関連する遺構等は現在確認されていませんが、新規入植者による開発型集落という性格上、本遺跡を拠点としながら後の荘園につながっていく可能性もあり、荘園経営の当初の姿を本遺跡の奈良・平安時代の集落が示唆しているかもしれません。今後継続する調査の成果が期待されます。